

山形県の草地、飼料作物の現況と問題点

高 瀬 七 郎

(山形県畜試)

本県における畜産の現況として最近発表されている生産指数より眺めてみると、農業生産額はおよそ 821億円で、うち畜産が10.6%を占めており稲作に次ぐ生産額をあげ、35年を100とすれば40年は191%と上昇している。

1. 草食動物の飼養状況

1. 乳 牛

飼養頭数——23,100頭

飼養規模——1戸当り1.82頭

乳牛の飼養規模は小さく1戸当り頭数は全国最下位にあり、副業的零細酪農である。牛乳の生産量は約 4,400トンで約17億円となる。

2. 肉用牛

飼養頭数——34,800頭

飼養規模——1戸当り 1.2頭

黒毛和種を主体とし山間、山麓地帯に多く飼育されているが、他県と同様頭数の減少をみている。

3. その他の家畜

山羊は約40,000頭と横這いを示し、めん羊は 3,000頭と激減をみた。

4. 酪農における飼料費の実態

41年度実施の牛乳生産費調査によると飼料費として58.5%を占め、うち購入36.7%、自給21.8%と依然として飼料自給度が低く、乳飼率は理想といわれている30%をはるかに上廻っているものが多く自給飼料の高位生産をはかることが大切である。

2. 飼料作物栽培の現況と問題点

1. 現 況

一般に平野部では青刈とうもろこしの跡作に飼料かぶ(ライ麦、エン麦など)という作付けが大半であり、山麓地帯はとうもろこし1作というのみみられる。飼料作物栽培は農家の飼育形態により差異が認められ、1~2頭飼育では、サイレージ原料のとうもろこしと牧草、畦畔草、農場残滓を主とし、4~5頭飼育以上では牧草畑とうもろこし、飼料かぶなどをつくり高位生産をあげている農家も多くある。栽培面積の数値より最近の傾向として、牧草畑と人工草地、放牧地の増加が目立ち、この

主要飼料作物の栽培面積

青刈とうもろこし	約 1,050 ^{ha}
牧 草 畑	// 880
飼 料 か ぶ	// 350
青 刈 ラ イ 麦	// 280
// エ ン 麦	// 250
水 田 裏 作	// 300
	(35年, 4,000 ^{ha})

反面水田裏作の急激な減反を来していることが特徴であることが窺われる。

2. 主な問題点

- A. 高位生産力の平準化——安定多収技術
- B. 優良種子の確保——適応品種選定
- C. 貯蔵技術の普及
- D. 省力栽培、給与技術の普及
- E. 年間粗飼料の平衡と夏型飼料期の延長策

3. 人工草地の現況と問題点

1. 現 況

これまで造成された草地のうち比較的利用度の高い2,400^{ha}の利用区分は刈取利用35%、放牧利用65%に分けられるほか乾草生産を企業的に実施中の草地もみられる。一般に採草利用は年3~4回刈りが多く反収も3~5トン程度のものが多い。

放牧地は大小あわせて30カ所あり、50^{ha}以下のもの70%、50^{ha}以上のもの30%あり、放牧家畜は乳牛だけ16カ所、乳牛と肉用牛11カ所、肉用牛だけ3カ所に分けられ急速に放牧地の増加をみている。

2. 主な問題点

- (1) 稲作業との競合による1番刈りの利用が困難なため生産量が低下する憾みあり。
- (2) 2番刈りが入梅のため8月に延び刈取後、暑熱により夏枯れを助長することが多い。
- (3) グラスサイレージと干草調製技術を普及し、天候、労力に応じた高度利用を進める。
- (4) 放牧開始時期がおくれ春季輪換放牧において余剰草の活用が巧みに行なはれない。

- (5) 春季余剰草の備蓄作業が主として労力面より困難なものが多い。
- (6) 農家の放牧についての意識がやや低調であり、また多頭化が進まず入牧頭数が不安定である。
- (7) 育成牛の周年予託制が必要と思われる。
- (8) 集団管理技術の開発が未だしの感がある。
- (9) 放牧管理人の養成と身分確保の要あり。

以上極めて簡単に本県の飼料作物と人工草地について主として利用の現況とおもな問題点の概要を記したがその他草地の管理、牧養力の向上策など各種の難問が山積し新しい畜産発展の道はなかなか難しいことの連続であり、今後着実な技術開発を進めようとしている。幸い目下本県には放牧病の被害が少ないことが明るい面でありこの清浄地帯確保に努めて行きたいと思う。

岩手県における乳牛飼養と草地利用

小 松 睦 男

(岩手県農業改良課)

1. 草地、飼料作物作付面積の伸びに比べて乳牛、乳量の伸びは緩慢である

本県は紫波郡を除いて、全県が集約酪農地域で、いわば各地とも酪農の産地形成につとめているが、近年の推移は第1表のとおりである。

草地造成がすなわち自給率の向上および飼養頭数の増加となり、生産性向上、経営の安定となっているとばかりは思えない。低乳価とか、濃厚飼料高とか、飼養技術水準、等々理由は考えられるが、草地が地域、農家が牛に十分結びつかず、よく利用されていないからではなか

ろうか。

2. 造成後の草地の維持管理利用に重点をおけ

草地は長く無駄なく利用され、利用できる条件が生まれてこそ飼料構成の改善→多頭化→生産性向上(生産費低減)→経営安定→酪農意欲の向上、産業として発展が期される。造成後の草地の維持、管理、利用についてもっと農家側に立った行政、指導、研究分野の取組みがいろいろと思う。

県内の草地の利用実態を昨年度44普及所の協力で調査したところ2、3表のとおり利用回数も少なく、収量も

第1表

区 分	年 次	昭和35年	37年	39年	40年	41年	42年
集約牧野の伸び	100	100	161.5	266.2	323.5	396.5	
	1,635	1,635	2,642	4,358	5,240	6,484	
飼料作物(牧草含)作付面積の伸び	100	100	147.3	194.3	208.4		
	10,161	10,161	14,967	19,840	21,179		
乳牛頭数の伸び	100	100	114.2	163.7	173.6	178.6	183.9
	36,610	36,610	41,930	56,940	63,590	65,150	67,330
年間生乳生産量	100	100	122	176	188	205	
	63,132	63,132	77,041	111,037	119,300	129,291	
搾乳牛頭数比	100	100	111	160	194	196	
搾乳牛1頭当り搾乳量		4,151	4,551	4,556	4,047	4,340	
酪農家1戸当り乳牛飼養頭数		1.9	2.1	2.6	2.7	2.8	2.9